

---

# 臥薪嘗胆

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
臥薪嘗胆

【Nコード】  
N6636K

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
八誠は学生時代臥薪嘗胆という言葉を学んだ。そして社会人になった彼はその時それを思い知り仕事にさらに励むようになり。ビジネスのお話です。

## 第一章

### 臥薪嘗胆

「臥薪嘗胆というのはだ」

学校の授業で先生が話していた。

「中国の昔の話でだ、恥や恨みを忍んで忘れずそれを晴らすことだ」  
それだというのである。教壇からそう話していた。

「そうした話もあるということだな」

そんな話をしていた。それを前原八誠は教室の机から聞いていた。そして話を聞いてから。クラスメイトと話した。黒い髪を伸ばし前で真ん中から分けている。小さく細めの黒い目をしていて眉は細く黒い。口元は下にやや弓なりになっている。鼻はそれなりに高い。背は一八〇近い。その身体を学校の制服の青い詰襟で包んでいる。

その彼がだ。臥薪嘗胆について友人に尋ねるのだった。

「そうした経験はあるものか」

「ないんじゃないのか？」

「だよな」

皆それを言われると顔を見合わせて言い合った。今彼等は教室の後ろに立ってそこで顔を見合わせて話をしているのである。

「滅多にな」

「恨みとか恥を忍んで何かをするってのはな」

「そうはないだろ」

「そういうものか」

「前原、御前にもそういうことないだろ」

「そういう経験は」

友人達は八誠に対して尋ね返した。

「そこまでして何かやるってな」

「ないだろ」

「ない」

やはりそれは無いというのである。

「そこまでの経験はない」

「普通はそうなんだよ」

「そうしてやることってな」

「だよな」

そしてこんな話にもなるのだった。

「相当なものだしな」

「そのこと自体がな」

「あの話だとだ」

その臥薪嘗胆の逸話そのものについても話される。この逸話自体はその中国の古典である司馬遷の史記に由来するものである。

「相手の国を倒してるな」

「ああ、痛い薪の上に寝てな」

「苦い肝を嘗める」

実際にそうしたのである。史記にある話ではだ。

「そうして恨みを忘れないでな」

「ことを成したんだよ」

そうしたというのである。これが臥薪嘗胆である。

「御前もそこまですることってないよな」

「俺もないしな」

「なあ」

彼等はないというのだった。とてもそこまではだ。

「そういうのはな」

「そうそうな」

「そうだな」

まさにそうだという八誠だった。

「俺にもない」

「まあそうだよ」

「人生案外気楽だからな」

そういうものだというのだ。

「別にどうこうないしな」

「そこまでっていうのはな」

「そうだな」

八誠もその言葉に頷いた。

「俺にもない」

この時はそう思えた。これは彼が高校の時の話だ。しかし彼が高校を卒業して大学に入り社会人になった時だ。こんなことがあった。会社の中でだ。上司である部長にこう言われた。

「君が今進めているプロジェクトだが」

「はい」

「あれは中止になった」

こう彼に対して告げるのだった。

「申し訳ないがな」

「中止ですか」

「状況が変わったんだ」

部長は自分の席の前に立つ彼に対してまた告げた。今の彼はスーツである。それを端整に着こなして立っている姿は如何にも有能そうである。

## 第二章

「残念なことだ」

「何故そうなったのですか」

「出し抜かれた」

部長の言葉がここで苦いものになった。

「見事にな。出し抜かれたんだよ」

「その相手は」

「あそこだ。山川コーポレーションだ」

そこだというのである。

「そこにしてやられた」

「そうでしたか。あそこでしたか」

「わしにしてもな」

部長は苦い顔で首を捻りながらまた述べた。

「残念な話だ」

「この借りは必ず」

八誠は言葉には抑揚がなかった。だが感情は確かにそこにあった。その言葉で言うのだった。

「返します」

「やってくれるのだな」

「必ず」

彼は部長に対して断言した。

「やってみせます」

「なら頼むぞ」

「任せて下さい」

「時には悔しさをバネにすることも必要だ」  
部長はこつも言った。

「それもな。必要だ」

「そうのですか」

「つまりあれだ」

そしてここでこう言つのであつた。

「臥薪嘗胆だ」

「臥薪嘗胆ですか」

「今回がまさにそうだ。頑張ってくれよ」

「わかりました」

こうして彼は仕事を出し抜かれたことを覚えそうして戦いに向かうのだつた。

まずは家に戻つて。妻に静かに述べた。

「部屋に巨人の選手の写真を飾つてくれ」

「部屋に？」

「それを見て怒りを思い出す」

そうするといふのである。

「怒りをだ」

「巨人日本一になつたのがそんなに頭に来るの？」

「それだけじゃない」

「じゃあ何をするの？」

「仕事をする」

「お仕事と巨人がどう関係があるのよ」

それを言われても妻には話がわからなかつた。そして八誠はその妻に対してさらに言つてきたのである。今度言ふことは何かといふと。

「それで料理はな」

「お料理は？」

「レバーを頼む」

それだといふのである。

「他には内臓もいい」

「レバーね」

「内臓は魚の内臓がいい」

注文をさらに付ける。

「いいな」

「苦いものばかりね」

「ああ、それでいいか」

「別にいいけれど」

妻は応えながらも首を傾げる。夫の考えがわからなくなっているのだ。

「身体にいいしね」

「じゃあそれで頼んだぞ」

「何かよくわからないけれどとりあえずそうするのね」

「ああ」

「わかったわ。それじゃあ」

こうして彼は夜に彼の大嫌いなチームの選手の写真を見て苦いものを食べる。そうして仕事での悔しさを常に記憶に止め仕事に励んだ。



### 第三章

まずあるプロジェクトを考え出した。それを部長に提案した。

「おい、こんなことを考え出したのか」

「どうでしょうか」

「凄いことを考えたものだ」

部長はファイルにしたそのプロジェクトを見ながら思わず唸っていた。

「これは実行に移したら凄いことになるぞ」

「やって宜しいでしょうか」

「ああ、是非やってくれ」

彼はすぐに太鼓判を押した。

「いいな、すぐにだ」

「わかりました」

「責任はわしが持つ」

部長はこうまで言った。

「我が社にとって大きなことになるぞ」

こうして彼のプロジェクトは実行に移された。話はそのまま他社にも持ち掛けてそのうえで、今回はライバルである山川コーポレーションを見事出し抜いたのである。

彼は見事雪辱を晴らした。大成功であった。

「上手くいったな」

「はい」

八誠は部長に対して述べていた。

「今回は」

「君は見事雪辱を晴らしたわけだ」

部長はにこにことして彼に話す。

「よくやったな」

「それで後は」

「君は少し休んでくれ」

そうしてくれというのである。

「有給を取ってな。英気を養ってくれ」

「わかりました」

「ポーナスも出るぞ」

このことも八誠に言ってきた。

「それではな」

「はい、それでは」

こうして彼はポーナスと有給を手に入れて妻と楽しい旅行に出掛けた。妻と二人で熱海に出掛けそうして楽しい時間を過ごしたのだ。つた。

しかし有給が終わり会社に戻ってみると。彼にとってあまりよくないニュースが入って来ていた。

「山川コーポレーションもやるものだ」

「まさか向こうも」

「やり返してきた」

こう彼に告げてきたのだ。

「早いがな」

「まさか向こうもプロジェクトをですか」

「それで業績を伸ばしてきた。我が社とまた競り合ってきた」

「私が出したプロジェクトで負けてもですか」

「向こうもやられっぱなしではいられないというわけだ」

そつだというのである。敵もさるものだ。

「つまりだ。向こうもだ」

「向こうも」

「臥薪嘗胆というわけだ」

それだというのである。つまりはそういうことだった。

「それは君だけではなかったということだ」

「向こうも。では」

「また頑張るとしよう」

八誠に対する言葉だった。

「それでいいな」

「わかりました。それでは」

「しかしな」

ここで部長は少し溜息を吐き出した。それを一息にしてまた言うのだった。

「世の中とはこういうものかも知れないな」

「といますと」

「悔しさをバネにして頑張るな」

「はい」

それは彼もよくわかった。臥薪嘗胆である。

「皆同じということだ。ライバル会社もな」

「お互いということですね」

「そうだ。そうしてお互い生きていくのだろうか」

「そしてその先には」

「さて、終わりはあるかな」

部長はこんなことも口にした。

## 第四章

「死ぬまで。いや、その人間が死んでも後の人間がな」

「そうしていくと」

「永遠にそうかもな。だがそんな先のことを言っても仕方がない」

「まずはそのライバルに向かう為に」

「そうだ、また頑張ろう」

とにかくまずはそれであつた。何につけてもである。

「いいな、それで」

「はい、それでは」

「頑張ってくれ。またな」

部長の言葉を受けてだ。家に帰るとまた妻に対して言うのであつた。しかし今度は言うことが多少ではあるが違つていたのだつた。

「ゴージャを多くしてくれ」

「今度はゴージャなの」

「それとあの知能の低い猿みたいな顔のボクサー一家の写真を部屋にな」

飾るといのである。彼の嫌いなボクサーのことだ。三人兄弟で二番目が切腹だの何だのといひ日本十二所の馬鹿さ加減を知らしめた恥知らずな一家である。

「飾る」

「またお仕事でなのね」

「そうだ。ゴージャでなければセロリでも何でも苦い野菜ならいい」

「とにかくな」

「苦いものをなのね」

「それを頼む」

「ごう妻に話すのである。

「わかつたな」

「最近苦いもの好きね」

事情をあえて聞かない妻はこう言っただけだった。

「舌が変わったの？」

「舌はそのままだ」

それは変わらないというのである。

「ただな」

「ただ？」

「忘れないようにする為だ」

だからだと。妻にはこう答えるだけだった。

「それでだ」

「忘れないね。何かよくわからないけれどわかったわ」

「そうか」

「あえて聞かないけれどね。まあとにかく」

妻はここで言った。こう。

「お仕事それで頑張ってるね」

「仕事？」

「そうよ、お仕事頑張ってるね」

優しい顔で夫に声をかける妻だった。その妻の言葉と顔を受けて八誠は有り難く思った。察してくれてそれで自分の為にしてくれる妻にである。だからこそ余計に意気をあげるのだった。自分の中で。

臥薪嘗胆

完

2009・12・22

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6636k/>

---

臥薪嘗胆

2010年10月8日15時12分発行